

# モンゴルにおける飼料生産の展開及び流通構造 —濃厚飼料を中心に—

共生農業資源経済学講座 食料農業市場学分野  
ガンバット・ウスフバヤル

## (背景と目的)

モンゴルは有史以来、永々と遊牧のスタイルを貫いてきたが、近年、都市近郊において集約的畜産が増えている。その背景としては、一般的には①地球温暖化の影響による砂漠化の進行や家畜頭数の急増による過放牧、②1999年より3カ年連続して発生した雪寒害(ゾド)による甚大な被害を受けて、遊牧をやめて集約的畜産経営に移行する牧民の増加、③モンゴル国政府による全人口の約6割を占める都市住民に対する食料品の安定供給を目的とした定住・半定住型集約的畜産の政策的な推進、④市場経済化による畜産業の発展、の4点が挙げられるが、本研究では③、④の側面に注目する。

現在、濃厚飼料の使用など飼料需要が増加し、流通過程において民間の飼料生産企業が登場し、飼料の流通構造が大きく変貌しつつある。

濃厚飼料は小麦製粉に伴うフスマが主体であるが、集約的畜産が更に増加してくる中で、小麦自給率の低いモンゴル国では、濃厚飼料の大分部を占めるフスマの供給には限界があり、飼料価格の高騰が懸念されている。事実、養豚や養鶏用は、主に中国からの輸入飼料が使用されている。それ故、今後の安定的な定住型畜産業の展開を展望する上でも、飼料流通の実態に注目する必要がある。

なお、モンゴルにおける集約的畜産とは、遊牧経営以外の畜産経営を定住・半定住型集約的畜産(以下、集約的畜産とする)と定義する。酪農、養豚、養鶏、養蜂が含まれる。

## (方法及び課題)

本研究の課題は、飼料生産企業であるA社を事例としてモンゴルにおける濃厚飼料流通の実態・問題点を明らかにし、モンゴルにおける飼料流通の展開を考察することである。対象事例とするA社は、モンゴルにおいて最大規模の飼料生産企業である。

以下ではまず、市場経済移行後を中心として、モンゴル国における畜産業の展開を整理する。続いて、飼料生産の動向及び飼料流通の特徴を指摘し、濃厚飼料の位置づけを示す。そして、A社への実態調査に基づき、モンゴルにおける濃厚飼料生産の展開を明らかにすることで上記の課題に接近する。